観光文化

Tourism & Culture

VOL. 186
2007 November

財団法人日本交通公社

特集◎ 源氏物語千年紀を祝う

◆巻頭言

源氏物語千年紀を迎えるにあたり　芳賀　徹……①

◆特集

- 千年の命を生きる『源氏物語』の魅力と現代的な意義　伊井春樹……②
- 『源氏物語』継承の歩みとその今日的状況　渋谷栄一……⑥
- 源氏物語千年紀事業について　木咲圭二……⑩
- 年の差は九百九十歳 ―源氏物語千年紀に向けて　岸本育男……⑭

◆視点

- 財団法人日本交通公社の調査研究小史(その２)
  ―観光計画分野を中心に　梅川智也……⑰

◆連載

Ⅰ　あの町この町　第24回

木の文化 ― 愛媛県・久万高原町　池内　紀……㉒

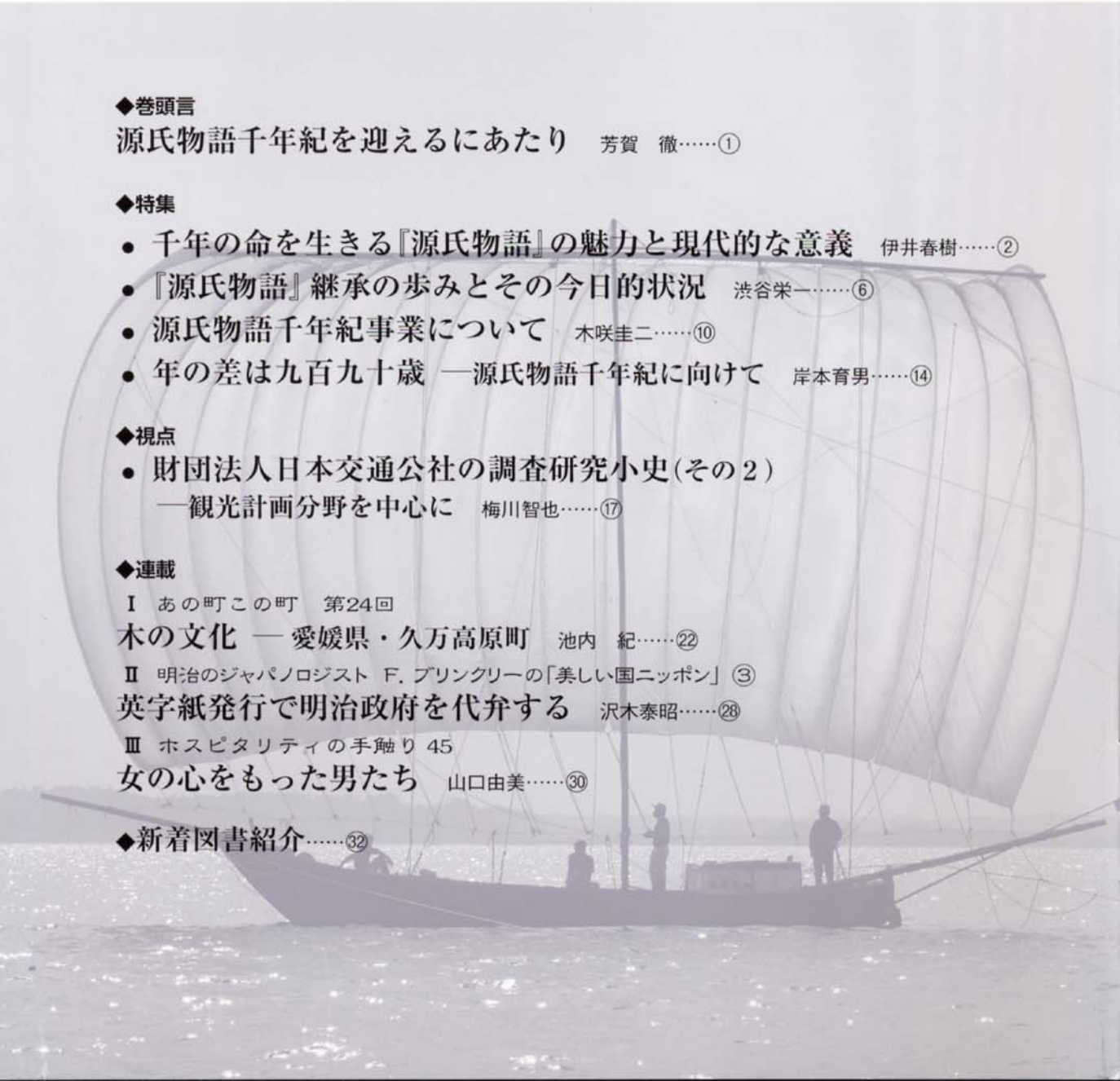
Ⅱ　明治のジャパノロジスト F. ブリンクリーの「美しい国ニッポン」③

英字紙発行で明治政府を代弁する　沢木泰昭……㉘

Ⅲ　ホスピタリティの手触り 45

女の心をもった男たち　山口由美……㉚

◆新着図書紹介……㉜



わき水の里・南阿蘇村

阿蘇山と南外輪山に囲まれた白水村（現・南阿蘇村）は熊本県の北東部、南阿蘇の中心部に位置する。私が訪れたとき、幸運にも十年に一度という雲海が現れ、雲の下に五町村がすっぽりと包まれ見事な風景を醸し出していた。熊本市を流れる「白川」の源流をなす「白川水源」が一九八五年に環境庁の〝名水百選〟に選ばれ脚光を浴びると同時に、熊本名水百選にも県内最多の七カ所が選ばれるなど「水の生まれる里」として、県内をはじめ各地から来訪者が後を絶たない状況である。

清く澄んだ水が地底からこんこんとわき出す光景は、神秘的ですらある。私が取材中、多くの観光客がひきも切らず大きなポリバケツやポリビンを提げて水くみに大勢押しかけていた。わき水のわき出す水源から流れ下る小川で野菜を洗う主婦たちの姿が朝の陽光にまぶしいばかりに映えて、すがすがしい風情をのぞかせていた。美しいわき水は、村のシンボルゾーンとして長く後世に伝えられていくことだろう。

（写真・文　樋口健二）

源氏物語千年紀を迎えるにあたり

京都造形芸術大学名誉学長
源氏物語千年紀委員会企画部会長　芳賀　徹

『源氏物語』五十四帖はつぎつぎに紅（くれない）や白や墨色の、色さまざまの大輪の花を咲き開かせてゆく牡丹の群れのようである。愛の苦しみがあり、よろこびがあり、切なく深い悲しみがある。宮廷貴族の権勢の栄耀があり、闘いと衰亡があり、庶民の声さえそこにまぎれこむ。そしてすべての生は花の香と夕映えと月の光につつまれて、「もののあはれ」を低唱しながら、死の薄闇のなかに消えてゆく。

ちょうど一千年前、この日本列島の平安の都で、一人の女房によって、すべて大和ことばで、このような深遠な大長篇の小説が書かれていたとは――。ただ驚嘆する以外にない。『源氏物語』は日本文明のもっとも美しい華であるばかりではない。世界文学史上の、また世界の文化史上の一つの奇蹟でもある。

昨秋、源氏物語千年紀委員会が発足するにあたって、発起人の一人として私は右のような言葉を記した。ただ、この中で『源氏』は世界文学史上の一奇蹟と書いて、少しばかり心配になって、もう一度世界文学史年表の類をのぞいてみた。すると確かに、『源氏』の同時代には、こと恋愛小説に関しては、これに匹敵するものが他のどこにもないのである。

スペインのコルドバ生まれのアラブの神学者イブン・ハズムが恋愛論『鳩の首輪』を書いたのが一番近くて、一〇二七年のことだという。だが、これは『源氏』のような犀利な愛の心理の物語ではなかった。中世フランス語の最古の叙事詩『ロランの歌』が成立するのは一〇五〇年のころだというが、これはむしろ『平家物語』のような武勲の物語であった。唐宋の中国にも恋愛詩はあったろうが、恋愛小説は『紅楼夢』が最初で、これはなんと清朝一八世紀の作である。

『源氏物語』はやはり奇蹟だ。しかも紫式部の前後には、同じ一条帝の宮廷に清少納言も和泉式部も赤染衛門も仕え、みなその絢爛たる才を誇り、周りの男性貴族の秀才たちとも丁々発止で教養を競い合っていた。

一一世紀初頭の都の一隅でなぜそのような文芸の練磨と創造が可能であったのか。そして彼らがみな深くその身に宿していた「もののあはれ」の感情、つまり人間存在の不安と不確かさという思想は、今日の私たちの心底をどれほど強く揺さぶって近代人の傲慢から目覚めさせてくれるのか。

二〇〇八年十一月、京都と東京で内外の文人、学者を集めて行われる予定の『源氏千年紀国際会議』は、この源氏の不思議とその精神史的意味を解き明かす重大な一つの機会となるはずである。

（はが　とおる）

源氏物語千年紀を祝う

来年は、『源氏物語』誕生千年を迎える。一千年の長きにわたり読み継がれ、今日でも人々を魅了する古典文学（文化資本）として、二十以上の言語で翻訳されている。今号では、日本が誇る古典文学の精華『源氏物語』の価値や今日的な意義をたずね、千年紀に向けたさまざまな取り組みを紹介する。

特集 1

千年の命を生きる『源氏物語』の魅力と現代的な意義

国文学研究資料館館長
伊井　春樹

講演・シンポジウム「一千年目の源氏物語」

東京・立川市役所に隣接する市民会館のアミュー立川のロビーには、十二時開場の三十分以上前からすでに長蛇の列。混雑するのを恐れ少し早めに開扉してもらう。九月二十二日（土）に、国文学研究資料館主催による講演会・シンポジウム「一千年目の源氏物語」を企画し、初めの心配など吹っ飛ぶほどの大勢の参加者でにぎわう。講師と演題は、大岡信「近江の君について」、岡野弘彦「『いろごのみ』の女神と光源氏」、丸谷才一「昭和が発見したもの」、加賀美幸子「私にとっての源氏物語」、司会は私が担当した。詩人、歌人、作家、それに番組キャスターという組み合わせである。今年の初めから企画し、講師の方々との交渉、日程調整、会場の予約、後援の依頼による協力など、遂行し終えるまで心配し通しであった。ポスター、チラシ、インターネットのほか、立川市、新聞社、ラジオ、週刊誌等の協力も得て申し込み先着千人としたところ、八月末で千三百人。慌てて受け付けを停止する。それでも最終的には二千人を超える人気ぶりで、数百枚の断り状を出すはめになるとは予想もしていなかった。

会場は二階席も入れると千三百人余の収容。一階に八百人も入れればほぼ満席の感じがするとの担当者の言葉ながら、無料とはいえ五百人を集めることができるものかどうか、私は著名な講師を頼んだ手前、応募者の数に敏感にならざるを得なかった。当

日都合で出席できない方もいたため、実質的な入場者は千二百人ばかり。それでも数の多さにはコーディネートした私もいささか驚きを禁じ得なかった。一人三十分ほどの基調講演、休憩の後、テーマに沿ってのシンポジウム。参加者は熱心に聞き入り、途中で帰る人もほとんどいなかった。とりわけ丸谷さんは原稿も準備され、昭和の文学史に位置づけた源氏物語論の熱意には、多くの人も感動したはずである。なお、この内容は十月十四日（日）の夕方六時から一時間番組としてＮＨＫ教育テレビで放送された。

「一千年目の源氏物語」　シンポジウム（2007 年 9 月 22 日）

各講師の話は、それぞれの分野からの専門的な内容。それでも多数の人々が参加するというのは、講師の魅力もさることながら、作品への関心の高さがあるからにほかならない。千年昔の古典文学、それが現代もこれほどまでに人気があり、人々を魅了してやまないというのはどうしてなのであろうか。単に古い作品とか、王朝文化への憧憬だけではなさそうである。

『源氏物語』の読者たち

『源氏物語』の名が初めて記録に登場したのは、『紫式部日記』の寛弘五年（一〇〇八年）十一月一日のことであった。一条天皇の中宮彰子は、父藤原道長邸に退出して九月十一日に敦成親王を出産。三日、五日、七日、九日と産養（うぶやしない）がなされた後、十一月一日に誕生五十日目の祝いが催される。大勢の公卿たちの参加による盛大な宴会。そこに歌人としてもよく知られている藤原公任が、少し酒に酔った勢いなのか、紫式部などが控えている辺りを訪れ、『源氏物語』を話題にして語りかけてくる。翌年には一条天皇も物語を目にしているので、この前後には『源氏物語』は書かれており、宮中社会を中心に読まれていたのは確かと言えよう。その年から数えると今年は千年、来年は満で千年目を迎えることになる。その間今日まで、ほとんど途切れることなく『源氏物語』は人々の関心の的となり、時代を超えて読み継がれてきたのである。シェークスピアの作品が世界の古典として名声を博しているとはいえ、それよりも六百年以上も古い時代に一大長編物語を著作した紫式部は、日本の誇りであり、『源氏物語』は世界における「文化資本」の一つと言ってもよいであろう。

ほかに作品はいくらも書かれたとはいえ、千年ものあいだ記録にとどめられ、読むための努力がなされ、文学だけではなくさまざまの分野に大きな影響を与えたというのは、『源氏物語』以外には存在しない。十四歳の少女孝標女（たかすえのむすめ）が『源氏五十余巻』に夢

中になり、暗記するほどであったとするのは治安元年（一〇二一年）であった。ただ、それから百年ばかりたち、言葉も異なってくるし、表現された世界がすぐさま理解できなくなってくると、どうしても読者との間をつなぐ注釈という作業が必要になってくる。とりわけ、『源氏物語』は歌人にとって不可欠な書だと主張されると、人々は無関心ではいられなくなる。このようにして、鎌倉以降、南北朝、室町、江戸期と時代を経るにしたがい、膨大な分量の注釈書やダイジェスト版、系図、手引書等が生み出されてくる。院政期から江戸末期までに、『源氏物語』関係の書物はおよそ六百種類にも及んでおり、文学作品や文化への影響まで視野に入れると、その存在は極めて大きなものとなる。

室町源氏

『源氏物語』は和歌の本として読まれただけではなく、連歌・俳諧の素養として、儒教・仏教の教えとして、また日野富子（将軍足利義政正室）や徳川家康のように政治への心得の書としても読まれてきた。江戸期になって本居宣長が、何かの役に立てようというのではなく、物語は物語として読むべきだとし、文学的な意義を「もののあはれ」だと主張する。それでも人々は、光源氏にあこがれ、紫上の生き方に共感し、『偽紫田舎源氏』のような読み物にふけり、『源氏物語』に依拠した能や歌舞伎を楽しみ、源氏香、かるた、すごろく等の遊びに興じ、錦絵を楽しむなど、〈源氏文化〉は多様に享受されていった。室町期までは、貴族や大名などの一部の知識階級の占有物だったが、江戸期になると出版文化の中で一般にも広まり、絵画化されることもあり大衆化されていった。

現代に生きる『源氏物語』

今日しばしば耳にする〈源氏物語ブーム〉は、千年という時を超えて読み継がれてきた現代の社会現象であるにしても、近年になって急に起こったのではなく、すでに江戸時代以来継続していると言っても過言ではない。海外にもそのブームは波及しており、『源氏物語』に関する研究集会、出版物、翻訳が次々と進行する。欧米でこれほどまでに知られるようになった直接のきっかけは、アーサー・ウェイリーによる翻訳本（一九二五～三三年）の出現によっており、東洋の千年昔の作品が一挙に世界文学として認知されたことによる。一九七六年にはエドワード・サイデンステッカー訳、二〇〇一年にはロイヤル・タイラー訳と、これで三種の全巻の英訳が存在することになり、読みの深まりと読者層はさらに拡大し、研究書も多数まとめられる。英語だけではなく、中国語は四種、フランス語、ロシア語、ハングルなどが存し、四冊のうち三冊までが出版されているチェコ語、来年には出るというトルコ語、翻訳が完成に近づいているイタリア語など、今後もこの傾向は続いていくであろう。

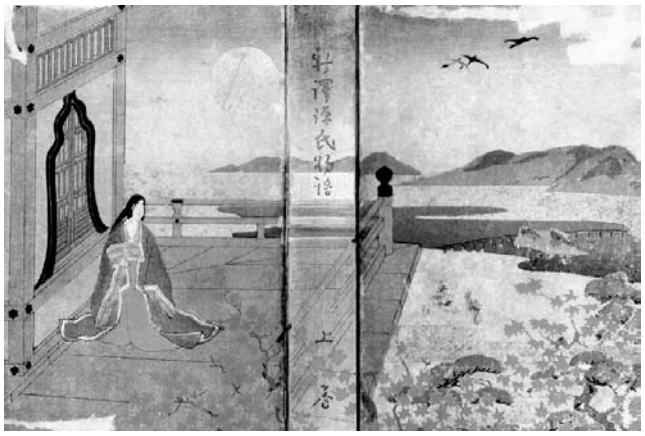
日本の現代語訳も与謝野晶子（二種）、谷崎潤一郎（三種）の訳はよく知られているところで、ほかに円地文子、田辺聖子、瀬

戸内寂聴などと続いており、ほかに漫画やアニメとなり、映画、テレビドラマ、舞台、オペラ、舞踊、朗読等、さらには現代化された香、菓子類に至るまで、『源氏物語』はますます日常生活にまで浸透してきている。『万葉集』『枕草子』といった作品も、人気があるといっても、これほどまでに一つの文化を形成するまでには至らない。

『源氏物語』は確かに千年昔の作品とはいえ、いつの時代においても受け入れられているというのは、普遍的な生命を持っているからなのであろう。それぞれの時代の人々が、自分たちと同じように生きた存在として受け入れ、読み継いできたところに、紫式部の作品の大きさがある。光源氏というたぐいまれな美しい貴公子が、その生涯において多くの女性たちとかかわりを持ったと説明すれば、『好色一代男』の世之介のようになってしまうが、表面はそうであっても、一人ひとりの女性との真摯な対応と運命、女性にあっては愛と悲しみ、喜び、そこから生じる苦悩など、まさにいつの時代も変わらぬ人間の生き方が描かれているのだ。紫上は幸せであったのか、藤壺の自己犠牲の生き方とは、浮舟は果たして人間として救われたのか、読者は物語の世界に共感しながら読み進め、時には涙を流し、心の落ち着きを味わったりする。

『源氏物語』は現代人が読んでも、そこに描かれた人物は現代にも通じる生き方をしており、言葉の障壁を超えて理解し合えるところに、不思議にも引きつけられ、物語のとりこになってしまうのであろう。単なる「お話」が書かれているのではなく、語られた世界は現実に通じ、私たちにさまざまな訴えかけをしてくるのだ。それが限りない魅力として読み続けられてきたのだろうが、私たちはこの「文化資本」としての『源氏物語』を、さらに今後の千年も維持し続けることが使命であろう。それぞれの時代の人々が読み継ぎ、そこからさらに新しい文化を生み出す源泉となるのが、真の古典と言えよう。

（いい　はるき）


新訳源氏物語表紙（与謝野晶子）

源氏すごろく

『源氏物語』継承の歩みとその今日的状況

高千穂大学　経営学部教授
渋谷　栄一

『紫式部日記』の寛弘五年（一〇〇八年）十一月一日に、一条天皇の第二皇子・敦成親王御誕生五十日（九月十一日誕）の祝いの席で、左衛門督藤原公任から「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶらふ」と話しかけられ、紫式部はそれに対して「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはんと、聞きゐたり」ということが記されている。「若紫」とは『源氏物語』に登場する若草の君、すなわち紫の上のこと、「源氏」とは言うまでもなくその物語の主人公光源氏のことである。紫式部作『源氏物語』初出の記事であるので、源氏物語誕生の年ともされている。

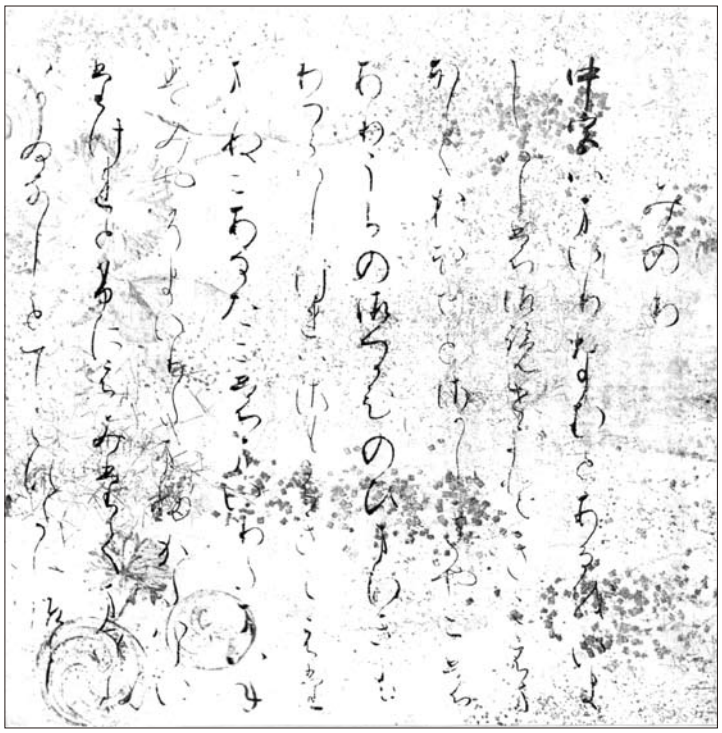
藤原公任は、漢詩・和歌・管弦の三舟の才を称され、『拾遺集』の成立に大きく関与し、歌学書では『新撰髄脳』『和歌九品』『古今集注』『歌論義』『四条大納言歌枕』を著し、私撰集では『拾遺抄』『金玉集』『深窓秘抄』『如意宝集』、秀歌撰に『前後十五番歌合』『三十六人撰』、朗詠集に『和漢朗詠集』、有職故実書に『北山抄』、仏教注釈書に『大般若経字抄』、家集には『公任集』（五百六十五首）があり、漢詩は『本朝麗藻』等に収載されている当代きっての一流の文人官僚である。その公任が源氏物語を読んでいて、紫式部に呼びかけたのだ。さらに「内裏の上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、『この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし』と、のたまはせけるを」と、一条天皇も源氏物語を読み、紫式部の才能をたたえていたことを記している。

出産を無事に終えた中宮彰子は、内裏に還啓するにあたって、豪華清書本『源氏物語』の製作を企図した。父藤原道長が「よき薄様ども、筆、墨など」を援助し、「いろいろの紙選りととのへて」能書家に清書を依頼して作成したものである。十一月十六日に内裏還啓の予定となれば、半月しかない。お産後落ち着いた初冬十月から始めたとしても一カ月半であるから、源氏物語五十四帖全部の清書は少し無理である。それは源氏物語の一部であったろう。

源氏物語と同じ寛弘五年に生まれた『更級日記』の著者である菅原孝標女は、かねがね読みたいと願っていた源氏物語が手に入って「后の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのこと」なく夢中になって読んだことを記している。

元永二年（一一一九年）十一月二十七日、白河上皇・鳥羽天皇の中宮藤原璋子（待賢門院）によって『源氏物語絵巻』二十巻の

作成が計画された。詞筆者に、藤原忠通・源有仁・藤原伊通等。絵筆者には、紀局・長門局、その他。そして保安年間（一一二〇～一二三年）ころに完成したとされる。現存する国宝『源氏物語絵巻』はその一部である。その詞の料紙と筆跡の美は、幻の豪華清書本『源氏物語』を想像させるに十分である。



『源氏物語絵巻　御法・詞』（五島美術館蔵）

平安末期には藤原伊行によって源氏物語の最初の注釈書である『源氏釈』が著された。「……とあるところは……といふ古歌の心也」という、源氏物語の本文を引用してそこに踏まえられている和歌や漢詩文等の出典を指摘するものであった。

『千載和歌集』の撰者である藤原俊成は、建久四年（一一九三年）に『六百番歌合』の判詞で「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」と述べた。以後、源氏物語は歌人必読の書となった。平安末期ごろから鎌倉期になると、書写によって読まれた源氏物語の本文には異文が多数生じた。俊成の子息である定家は、源氏物語の諸本を見合わせて「猶狼藉未散不審」と言って、「数多旧手跡之本」を探し求めて家の証本となるテキスト作成を行った。尊経閣文庫蔵『花散里』『柏木』と個人蔵『行幸』『早蕨』および個人蔵『源氏物語奥入』はその現存する一部である。定家が書写校勘した本は、二条家の古今伝授と定家を尊崇する連歌師たちによって広く流布していくことになる。その後、定家筆の『源氏物語』は「京極中納言定家本号青表紙、宗祇用之に今流布す。一華堂云、定家の青表紙を周防国守にて一覧せり。（略）定家卿自筆は桐壺・花宴・橋姫の三冊也。余は俊成卿女なとの筆也。水尾尽巻うせしを逍遥院殿書たし給へり」（源義弁引抄）と、一華堂乗阿が周防国守で青表紙本を一覧したが、定家自筆は『桐壺』『花宴』『橋姫』の三冊だけで他は別人の筆だったという。

一方、源光行・親行父子は源氏物語の『廿一部之本』を対校して、『河内本源氏物語』を完成させた。尾張・徳川家蔵『尾州家本源氏物語』はその系統の写本である。その他の古写本としては、京都・近衛家蔵『陽明文庫本源氏物語』などが伝わっている。

ところで、源氏物語の注釈書は、「正六位上物語博士源惟良」と自称した四辻善成

の『河海抄』、「一天下無双の才」人・太閤一条兼良著の『花鳥余情』、三条西家の源氏学である『細流抄』、中院通勝の諸注集大成の『岷江入楚』等が作られたが、源氏物語本体とは別冊仕立ての古注集成的な注釈書はますます大部なものとなっていった。そうした男性貴族たちの著作に対して、花屋玉栄という女性によって「おさなき人女たちのため」に平易に著した『花屋抄』（文禄三年〈一五九四年〉）が現れたことは注目される。

また一方で、大部な源氏物語をダイジェストした梗概本『源氏小鏡』（南北朝期）、『源氏大鏡』（室町末期）や挿絵入りの『十帖源氏』（野々口立圃）が作られたり、また初心者・幼少者向きに『おさな源氏』（野々口立圃）なども著された。

江戸時代に入ると、それまで別冊仕立てで不便であった注釈書の形態を、源氏物語本文中に頭注と傍注で記して一体化させ読みやすくした北村季吟の『源氏物語湖月抄』（延宝元年〈一六七三年〉）が作られた。この形態は今日の校注本の祖型である。また山本春正による本格的な挿絵入りの『源氏物語』（慶安三年〈一六五〇年〉）も作られた。本居宣長の『紫文要領』や『源氏物語玉の小櫛』など優れた研究書も著された。それらが木版印刷によって大量に出版されて普及していった意義は大きい。

一方、国宝『源氏物語絵巻』の後には、墨だけで描いた『白描源氏物語絵巻』や色紙に彩色で描いた『源氏物語画帖』、扇に描いた絵を屏風に張った『源氏物語扇面散屏風』、五十四帖の各場面を直に屏風に描いた『源氏物語五十四帖屏風』、源氏物語の一つの帖を一つの屏風に描き一対としたものなど、さまざまな形態の源氏絵が多数製作され、土佐派や狩野派、住吉派等の絵師の活躍が見逃せない。琳派の俵屋宗達は『源氏物語関屋図屏風』および『源氏

俵屋宗達筆『源氏物語澪標図屏風』（上）および『源氏物語関屋図屏風』（下）（静嘉堂文庫美術館蔵）

物語澪標図屏風』を描いた。そのほかにも源氏物語にちなんだ絵柄は、貝合わせ道具や、衣装、蒔絵・調度類にまで広く及んでいる。

昭和五、六年（一九三〇、三一年）ころに、佐渡の某家から飛鳥井雅康等筆『源氏物語』（五十三帖、「浮舟」欠）が出現した。現存する定家筆の『花散里』『行幸』『柏木』『早蕨』と同様に、帖末に奥入があり本文中には引歌等の付箋を貼付していることなどから、定家の青表紙本系統の最善本と認められ、池田亀鑑によって『校異源氏物語』（昭和十七年〈一九四二年〉）の底本として採用された。さらに定家筆本の臨模本・明融筆の八帖（桐壺・帚木・花宴・若菜上・若菜下・柏木・橋姫・浮舟）が出現し、戦後の『源氏物語大成』（昭和三十一年〈一九五六年〉）に「補正」として加えられて以来、源氏物語の底本として多くの本に採用されて今日に至っている。定家筆の『花散里』『柏木』は原装複製本の形態で、明融臨模本は『東海大学蔵桃園文庫影印叢書　源氏物語（明融本）ⅠⅡ』として、飛鳥井雅康等筆本は『大島本源氏物語』（十冊・別1）として共に写真影印本の形態で刊行されている。その他、河内本や別本の古写本も多数複製本あるいは写真影印本の形で刊行されている。

『源氏物語の世界』
（http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/）

近代から現代の作家による現代語訳としては、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴訳ほかがあり、演劇や映画、TVドラマにもなり、漫画では大和和紀の『あさきゆめみし』が著名である。西暦二〇〇〇年には、二千円札が作られ、国宝『源氏物語絵巻』鈴虫巻第二段の源氏と冷泉院の父子対面の場面と『紫式部日記絵巻』から紫式部の顔が取り込まれたことが話題を呼んだ。

一九九五年にウィンドウズ95が発売され大きく環境が変わった。従来の紙の本に対して電子本が加わった。源氏物語のテキスト・音声・動画のマルチメディアによる初のCD-ROM『源氏物語　上下』（平成八年〈一九九六年〉）が出た。紙の本ではできない新たな可能性が切り開かれた。その後、『源氏物語（絵入）［承応版本］』、『源氏物語本文研究データベース』、『角川古典大観源氏物語』が出た。今秋には飛鳥井雅康等筆本の全文を原色カラー画像に収めた『大島本源氏物語DVD-ROM版』が発売される。一方、インターネットのウェブ上には、源氏物語の原文（定家筆本・伝明融臨模本・飛鳥井雅康等筆本）の翻刻本文・整定本文・ローマ字版・現代語訳・注釈をアップした『源氏物語の世界』（一九九六年）や京都大学蔵の貴重書中院文庫本『源氏物語』、九州大学蔵の無刊記古活字版本『源氏物語』の全文画像などが見られる。その他、個人・機関、研究者・非研究者を問わずさまざまな源氏物語関連ホームページがウェブ上にはきら星のごとく存在している。

二〇〇五年秋に、国宝『源氏物語絵巻』復元摸写の絵が完成した。次は詞の復元だそうである。紙の本においても、かつて豪華清書本『源氏物語』が作られたように、日本の和紙と本作りの伝統、そして印刷技術の粋を集めた二一世紀の豪華本『源氏物語』の復元再生を期待したいものだ。

（しぶや　えいいち）

特集３

源氏物語千年紀事業について

源氏物語千年紀委員会事務局次長
木咲　圭二

源氏物語千年紀委員会

二〇〇八年（平成二十年）に、源氏物語が書かれていたことが確認できるときから一千年を迎えます。

源氏物語千年紀のよびかけ（京都および東京）

この千年の大きな節目となる機会をとらえて、「紫式部の輝かしい偉業を讃えるとともに、『源氏物語』が後世の日本や世界の文化に与えた影響を検証・再評価することは、世界における我が国の文化を再認識し、世界に誇る古典遺産を次の世代へ繋ぐ上で、この時に生まれあわせた私たちの責務ではなかろうか」と、二〇〇六年十一月一日に、秋山虔氏、梅原猛氏、瀬戸内寂聴氏、千玄室氏、ドナルド・キーン氏、芳賀徹氏、村井康彦氏、冷泉貴実子氏の八人から「源氏物語千年紀のよびかけ」が行われました。

このよびかけを受け、京都府、京都市、宇治市、京都商工会議所をはじめ源氏物語にゆかりのある団体等が「源氏物語千年紀委員会」（会長・村田純一(財)京都文化交流コンベンションビューロー理事長。以下「委員会」という。）を二〇〇七年一月に設立し、多彩な取り組みを進めることとしました。

二〇〇七年四月には、委員会の事務局を、京都御所や紫式部の邸宅跡地にある盧山寺の近く、一八六九年（明治二年）に創設された番組小学校の一つである元春日小学校内に開設しました。委員会のよびかけ人代表の千玄室裏千家前家元をはじめ関係者の出席のもと開催した事務局の開設式には、シラク前仏大統領から「源氏物語は世界文学の傑作であり、驚くほどの現代性が感じられます。千年紀に際しフランスの出版社

が源氏物語の出版を企画し、また、千年紀は日仏交流百五十周年、京都パリ友情盟約締結五十周年の年でもあります。これらにより、日仏両国の関係がより飛躍し、さらには新たな発見や交流の機会となるでしょう」とのメッセージが寄せられるなど、源氏物語千年紀への取り組みは大きな期待のなかで始動しました。

現在、事務局は、山本壮太ゼネラルプロデューサー（前NHK文化センター大阪総支社長）を筆頭に、京都府、京都市、宇治市からの派遣職員、海外美術館での学芸員経験者などにより運営しています。

また、京都市東京事務所内に東京オフィスを設け、東京における活動の拠点としています。

源氏物語千年紀事業「紫のゆかり、ふたたび」

源氏物語千年紀への取り組みの方向性を示す事業構想は、委員会の企画部会（部会長・芳賀徹京都造形芸術大学名誉学長、委員会のよびかけ人）において、委員会設置以降、熱心な議論を重ねていただき、シンボルマーク、キャラクターとともに二〇〇七年五月に策定、発表しました。

源氏物語千年紀事業の基本理念は、「紫式部ら平安女性の偉業を讃えるとともに、遙かな時空を縫って伝えられてきた大切な宝として、「源氏物語」が宿す日本文化の美と思想を、あらためて広く分かち合い、後世に伝えていく」もので、「紫のゆかり、ふたたび」をキャッチフレーズに取り組むこととしています。

事業の目的は、次の三点です。

一．女性が活躍し、豊かに花開いた平安王朝文化を再評価するとともに、これを日本人の誇りとして次世代に伝える。

一．日本の古典の豊かな内容をくみ取り、文化の創造の縁（よすが）とする。

一．文化の力によってひとりひとりの生活に潤いを与え、地域・社会が輝き、経済活動に彩を添える。

これまでの取り組み

二〇〇七年は、源氏物語千年紀の気運醸成のための取り組みを進めています。

各種団体や事業者への源氏物語千年紀事業の説明や取り組みへの協力要請、葵祭や時代祭における横断幕掲出による源氏物語

葵祭でも源氏物語千年紀への期待が…

千年紀のＰＲ、うちわ、ポスター、キャラクターのシールによる啓発活動などを行ってきました。

シラク前大統領のメッセージにもあったように、フランスの出版社により、仏語版源氏物語が九月に出版されました。源氏物語は、多くの言語に翻訳されていますが、今回の出版は日本および海外の美術館等に収蔵される五百点を超える源氏絵を添えた三冊にもなるもので、この出版に先立ち六月にはプレスツアーが来日し、京都、宇治、大津の各地における取材への支援を、海外有力プレス関係者等招請京都委員会など関係者の協力のもとで行いました。

十一月一日には、プレイベントを開催し、全国から抽選で選ばれた約千人の参加のもと、委員会のよびかけ人でもあるドナルド・キーン先生の記念講演や、金剛永謹氏の舞囃子「源氏供養」などをお楽しみいただきました。また、源氏物語千年紀のイメージキャラクターを、ＮＨＫ大河ドラマ「風林火山」に由布姫役で出演の女優、柴本幸さんにお願いし、今後、ＰＲに活躍いただくこととしました。

源氏物語千年紀事業は委員会の活動のほか、多くの皆様の幅広い賛同と参画を頂いて取り組むこととしています。その一環として、シンボルマークやキャラクターを多くの方々に活用いただこうと、事業者への説明会を京都商工会議所および大津商工会議所などの協力のもと開催し、広く販売促進等での利用のほか、新たな商品やサービスの企画・開発の働きかけを行いました。この結果、これまで百二十件を超える使用申請があり、さらに日々相談や申請が寄せられています。

また、委員会以外の方が企画・実施される事業について、その趣旨や内容に応じて、委員会が共催、後援、協賛、推薦する制度を設けています。

委員会が承認した共催、後援、協賛事業は七十件を超えており、源氏物語に関する講演会や講座の開催、源氏物語絵巻や和紙人形の展示、源氏物語ゆかりの地を巡るウオーキングやスタンプラリーの実施、「京都・宇治灯り絵巻」や「須磨離宮月見の宴」の開催などが実施されています。また、源氏物語にも登場するものの、今では絶滅の危機にさらされている藤袴の育成、源氏物語絵巻や紫式部などを図柄とする二千円札をおつりに使うキャンペーン、源氏物語絵鑑の図柄をデザインにした宅配便送り状や宇治茶等の源氏物語千年紀記念商品の製作など多様な取り組みも進められています。

源氏物語は平安京を舞台の中心に、北山、野宮、大原野、大堰、小野など京都市内の地域のほか、宇治はもとより、須磨、明石、大津などさまざまな地域で話が繰り広げられます。源氏のモデルの一人とされる源融の山荘を前身とする清涼寺、六条院のモデルともいわれる源融の邸宅・河原院の址（石碑）、夕顔之墳（石碑）、源氏物語に登場する植物を植栽する城南宮など源氏物語ゆかりの地も多くあることから、京都市などにより、ゆかりの地を紹介するパンフレット「源氏物語を歩く」や旅行会社等向け「源氏物語フォトＣＤ」の発行、説明板の設置など、

紫のゆかり、ふたたび
源氏物語千年紀
キャラクター（紫式部）

源氏物語千年紀
紫のゆかり、ふたたび
シンボルマーク（B）

源氏物語千年紀に向けた環境づくりへの取り組みも進められています。

さらに、新聞による紫式部に関する連載記事、放送局による源氏物語に関する番組、雑誌による特集記事掲載、記念出版なども行われています。

二〇〇八年の事業展開

二〇〇八年には、十一月一日を記念の日と位置づけ、京都国際会館での記念式典を中心に、年間を通じてさまざまな行事、各種公演等を展開し、源氏物語や古典の研究者、愛好家のみならず、これまでなじみのなかった方にも触れていただける機会づくりに努めていきたいと考えています。

具体的には、日本・海外の源氏物語の研究者を招いて、源氏物語を国際的な視野から多面的にとらえ直す「源氏国際フォーラム」を東京および京都で開催する予定としています。これにより、内外の研究者やジャーナリストなどが交流をされ、将来にわたって古典を通じた国際的な相互理解が深まることが期待されます。

源氏物語検定の実施、書や絵画などによる源氏物語絵巻展の開催、源氏物語に関連する能・狂言・歌舞伎などの公演のほか、夜間に照明をおとしたなかで自然の光・音・香などを体感する「平安王朝の夜の再現」（仮称）などの企画を関係者とともに検討しているところです。

ウェブ上での展開を充実させ、より多くの方に興味を持っていただき、楽しんでいただけるようなコンテンツの提供も検討しています。

行政においては、京都府の京都文化博物館による源氏物語千年紀展の開催、開館十周年を迎える宇治市の源氏物語ミュージアムのフレッシュアップなどが予定されるほか、源氏物語や紫式部ゆかりの地の須磨や大津、越前市（旧・武生市）なども含め、関係自治体によりさまざまな企画が検討されています。このほか、各種団体や事業者、出版社、放送局などにより、源氏物語関連企画の検討や事業の実施が、二〇〇七年以上に展開されることが見込まれます。

おわりに

源氏物語千年紀への取り組みについては、全国の熱心なファンや、職業や趣味として源氏物語をテーマに活動されてこられた方々から、高い関心や期待が寄せられています。すでに開催された事業には定員を超える参加や募集があったケースも多くあり、千年にもわたり人の心を魅了してきた源氏物語の偉大さを感じさせられています。

委員会の構成メンバーはもとより、一人でも多くの皆さんがそれぞれの立場や視点で活動を展開され、それらが大きなうねりとなって二〇〇八年の源氏物語千年紀が盛り上がり、その目的が達成されることを念願しています。

（きさき　けいじ）

特集４

年の差は九百九十歳――源氏物語千年紀に向けて

宇治市源氏物語ミュージアム館長
岸本　育男

はじめに

源氏物語ミュージアムのある京都府宇治市は、小倉百人一首で喜撰法師が「わが庵は　都の巽鹿ぞ住む　世をうぢ山と人はいふなり」と詠んだとおり、京都市の南東に位置します。

琵琶湖から大阪湾に至る宇治川には宇治橋が六四六年（大化二年）に架橋され、宇治は京都と奈良および東国を結ぶ交通の要衝として発展してきました。

宇治は都に近く風光明媚であったことから、平安時代には貴族の別業の地、つまり別荘地として栄えました。そして、まさしく『源氏物語』の最後を飾る宇治十帖の主要な舞台となったのです。

時代が下がり、室町時代以降は時の支配者の庇護の下に、緑茶の産地として名声を馳せ、「宇治茶」は高級日本茶の代名詞として、現在も宇治を代表する伝統産業となっています。

源氏物語のまちづくり

このように源氏物語と宇治は深い縁がありましたが、一九八九年（平成元年）には国のふるさと創生事業として、二十一世紀を展望したアイデアを広く市民から募集し、「紫式部文学賞」「紫式部市民文化賞」が誕生したことから、より一層積極的に源氏物語をテーマとしたまちづくりに取り組んできました。

具体的には、両賞の授賞式をはじめ「宇治十帖」古跡めぐりスタンプラリー等のイベントを毎年秋に開催するほか、「源氏物語散策の道」を整備し、ハード面にも力を入れてきました。

源氏物語の世界を実体験できる「宇治市源氏物語ミュージアム」

源氏物語ミュージアムはこうした一連の事業の核施設、集大成をなすものとして、宇治川の流れを望む高台に、平成十年十一月に産声を上げた博物館施設です。後述するとおり、源氏物語が来年で千年紀を迎えることから、ミュージアムは源氏物語が生まれ

て九百九十年後に誕生したことになります。

地理的にも恵まれており、ミュージアムの南百メートルには一九九四年（平成六年）十二月にユネスコの世界遺産の「宇治上神社」が、対岸には「平等院」があります。歴史的にも大変価値のある立地であり、緑豊かなミュージアム周辺を散策していただくと、平安の雅やかな人々の往来をイメージできることでしょう。

源氏物語ミュージアムの役割

ミュージアムの来館者は女性が多いのが特徴です。また、市外からの来館者が七～八割を占めるため観光振興に大きく貢献していますが、一方で、開館時から源氏物語の情報発信にも力を入れてきました。

昨年も源氏物語の入門講座や連続講座、瀬戸内寂聴名誉館長の講座、さらには、ロイヤル・タイラー先生の「源氏物語フォーラム」などを開催しましたが、源氏物語の講座は毎回盛況です。

さらには、今年も昨年に引き続いて、源氏物語ミュージアム前の「さわらびの道」や宇治川の両岸など、延べ約三キロにわたり源氏絵巻灯籠がともる「京都・宇治灯り絵巻」が繰り広げられました。これに合わせてミュージアムでは夜間開館を実施しました。

常設展示だけではなく、講座開催等により多くの方にリピーターになっていただけるよう工夫に努めてきましたが、入館者は開館当初の十四万六千人から八万三千人まで減少し、先細りの状況が続きました。

しかし、昨年の後半あたりから来館者が増加に転じ、約九万人まで回復し、今でも増加傾向が続いています。

これは次に述べる源氏物語千年紀と無縁ではないと思われます。

「宇治十帖」のヒロイン浮舟と匂宮のモニュメント

源氏物語千年紀を機に

『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八年）十一月一日の一節に、貴族の間で源氏物語が読まれていたとされる記述があってから来年で千年を数えます。

このことから、二〇〇八年を源氏物語千年紀とし、京都からさまざまな事業を発信するために、源氏物語千年紀委員会が今年一月に設立されました。

委員会は京都府・京都市・宇治市・京都

宇治上神社のライトアップ

宇治川沿道に並ぶ街灯が幻想的な風景を演出
（京都・宇治灯り絵巻）

実物の牛車を展示

委員会のホームページ（http://www.2008genji.jp）では、これらイベント情報をタイムリーに更新しており、京都に足を運ぶ前にぜひホームページをご覧になっていただきたいと思います。

さて、二〇〇八年十一月一日には、本番の委員会主催の記念式典が執り行われます。委員会では、「十一月一日を古典の日に」という熱い思いで現在活動を展開されており、大いに期待したいところです。

ミュージアムのある宇治市でも、「紫のゆかり、ふたたび」を盛り上げるべく、準備を進めています。

その一つとして、ミュージアム・フレッシュアップ事業をご紹介いたします。

ミュージアム・フレッシュアップ事業

源氏物語が千年の時を刻む記念の二〇〇八年は、ミュージアムが誕生して十年に当たります。

ミュージアムはフレッシュアップ事業と銘打って、開館以来、初めての大規模なリニューアルを行います。

その主な内容は、常設展示の入れ替え、新しい映像の制作などであり、初めて来館いただいた方が源氏物語に興味を持っていただけるような仕掛けを考えるとともに、これまでに足を運んでいただいた方々には源氏物語の新たな魅力を発見していただけるような展示を企画していますので、楽しみにお待ちください。

結び

源氏物語ミュージアムでは、源氏物語千年紀が一過性のものではなく、全国はもとより全世界に源氏物語を知ってもらい、身近に感じてもらえる契機となることを願うと同時に、源氏物語に関する世界で唯一の博物館である源氏物語ミュージアムに、「来てみたい」「来てよかった」「また来たい」と感じていただけるよう、生まれ変わっていきたいと考えています。

（きしもと　いくお）

商工会議所を母体とし、日本全国の源氏物語にゆかりのある地・機関が共同して、全国に源氏物語千年紀を広めるべく、今、広報PRを中心に活動を展開しています。

十一月一日にはプレイベントとしてドナルド・キーン先生の講演をはじめ、金剛流の舞、アートパフォーマンスなど多彩な催しが行われました。

このほか、源氏物語をテーマにした多くの事業が千年紀委員会との共催や後援といった形で展開されており、今後、さらに盛り上がっていくことでしょう。

財団法人日本交通公社の調査研究小史（その2）
――観光計画分野を中心に

財団法人日本交通公社 研究調査部長
梅川 智也

九〇年代――バブル経済崩壊後の開発ブームが終焉を迎えた時代

一九八七年（昭和六十二年）に「交流ネットワーク構想」と「多極分散型国土形成」を目的とした第四次全国総合開発計画が策定されました。その戦略手段として位置づけられたのが、都市農村交流や大規模リゾート開発です。同じ年には、ゆとりある国民生活の実現と地域の振興を目的として「総合保養地域整備法（通称・リゾート法）」が制定されています。一九八五年（昭和六十年）のプラザ合意以降、内需拡大が指摘されるなか、全国で民間事業者による大規模リゾート開発が計画、開発されました。その後、バブル経済が崩壊した九〇年代後半は、国内景気の低迷が続き、開発案件は激減、ハコモノ優先のハード至上主義は終焉を迎えていきます。

そうしたなかで、当財団は、これまでの周遊型の旅行・観光形態だけでなく、滞在しながら地域を楽しむライフスタイルとしてリゾートを位置づけ、積極的な取り組みを行いました。リゾート法に基づく基本構想づくりでは、**山形県**、**宮城県**、**静岡県**、**和歌山県**、**滋賀県**、**沖縄県**などへの支援を行いました。また、リゾートに関する議論が未成熟のまま進んでいくことに懸念を抱き、民間を主体としたリゾート研究の非営利組織として**リゾート開発研究会**を一九八七年に設立。約二十年にわたり事務局として調査研究活動を続け、その成果を機関誌『**リゾート開発**』として出版しました。また、需要予測をはじめとする国土庁（当時）の**リゾート関連調査**や**リゾート整備アドバイザー派遣事業**なども受託しました。

民間の開発意欲が減退した後は、地方自治体によるオートキャンプ場の整備、例えば福島県による「**うつくしま・ふくしま県民の森オートキャンプ場**」の企画・計画から管理・運営手法に至るまで、総合的な調査受託をしています。また同じ福島県より「**地域資源活用リゾート推進マニュアル策定調査**」、その後「**会津フレッシュリゾート地域振興効果等調査**」などが引き続いて実施されました。民間による大規模リゾート開発から地域資源を活用したリゾートづくり、地域経済や雇用などへの影響にも配慮するという流れが見えてきます。ガット・ウルグアイラウンドによる米の自由化に対応した農業公園など都市農村交流の促進に関する調査なども行われた時代でした。

観光・交流を基本理念とした過疎市町村の総合計画策定にも関与しました。福島県下郷町では「**第三次総合計画**」、「**観光振興基本計画**」、「**国土利用計画下郷町計画**」の三つをセットにして、町の将来ビジョンをできる限り法定計画（地方自治法、国土利用計画法）の中で描きました。

地方自治法に基づく市町村の総合計画の策定は当財団ではこれが初めてです。

都道府県レベルの観光振興計画にも個性が出てきました。「新潟県観光収入倍増計画」、「高知県観光アクションプラン策定調査」、「彩の国観光振興ビジョン策定調査」、「山形県新観光振興計画策定調査」、「岐阜県観光マーケティング調査」、「三重県バリアフリー観光モデルコース調査」、「青森県文化観光基本計画策定調査」などです。なかでも沖縄県が実施した「観光振興の視点からみたインフラ整備のあり方に関する調査」は、社会基盤の整備に観光的な視点を導入するという、現在にも通じる先端的な調査でした。

また、北東北三県、南東北・越後広域、北陸三県、中国・四国横断など広域の観光振興計画、広域観光ルートの設定に関する調査も受託しました。

そして、都市と観光に関する調査も数多く実施されました。特に東京都はそれまで多摩地域と伊豆七島だけを観光の対象としていましたが、日本で最も人が集まる都心の魅力に着目し、当財団でも「都市観光の推進がもたらす経済的影響について」から始まり、「東京の都市観光施策に関する基礎調査」、「東京都新観光資源調査」など一連の調査研究を受託し、東京都における新しい都市観光政策立案に寄与しました。

九〇年代は既存の温泉観光地に関する調査が少ないのが特徴ですが、そのなかで特筆すべきは「草津温泉ブラッシュアップ計画」をスタートさせたことです。首都圏の老舗温泉地の活性化に女将さんの参加を仰ぎ、〝歩いて楽しむ温泉地〟という観光客の目線でのアクションプランづくりを三カ年かけて行っています。

観光に関する実践的な出版物の発刊を長年の目標としていた当財団ですが、一九九四年（平成六年）にようやく東洋経済新報社から『観光読本』を刊行することができました。その後、十年が経過した二〇〇四年（平成十六年）に、構成に修正を加えながらデータを新しく更新して第二版を発刊しています。

二〇〇〇年代――観光が地域づくり、国づくりの柱と位置づけられた時代

バブル崩壊後の混迷が続く九〇年代の終わり、一九九八年（平成十年）、新しい全総「二一世紀の国土のグランドデザイン」が、参加と連携による国土づくりをテーマに多軸型国土形成を目指して策定されました。観光振興についても、二一世紀の国土づくりに欠かせない要素としてこれまで以上の位置づけがなされました。

現在は、国土形成計画（全国計画）が策定中で、素案では人口減少社会における地域活性化の手法として観光の重要性が一層認識されたものとなっています。

ここまで観光振興が注目された要因として、二〇〇〇年（平成十二年）十月、十二月と相次いで観光政策に関する提言が行われたことが挙げられます。一つは経団連の「二一世紀のわが国観光のあり方に関する提言―新しい国づくりのために」であり、もう一つは、観光政策審議

観光読本［第２版］
［東洋経済新報社、（財）日本交通公社編］

これまでの全国総合開発計画における観光関連政策の変遷

	全国総合開発計画（全総）	新全国総合開発計画（新全総）	第三次全国総合開発計画（三全総）	第四次全国総合開発計画（四全総）	21世紀の国土のグランドデザイン（新しい全総）
閣議決定	1962年10月	1969年5月	1977年11月	1987年6月	1998年3月
策定時内閣	池田内閣	佐藤内閣	福田内閣	中曽根内閣	橋本内閣
基本目標	＜地域間の均衡ある発展＞	＜豊かな環境の創造＞	＜人間居住の総合的環境の整備＞	＜多極分散型国土の構築＞	＜多軸型国土構造形成の基礎づくり＞
開発方式等	拠点開発構想	大規模開発プロジェクト構想	定住構想	交流ネットワーク構想	参加と連携による国土づくり
観光政策の目的	産業開発と観光開発の地域的調整 ○工業の分散に応じた観光開発 ○産業開発の裏返しとしての観光資源保護	観光レクリエーション需要が今後の2年間で2倍に増大すると予測。そのためのレクリエーション空間確保と観光資源の保護が目的。	レクリエーション需要の増加を予測。これに対する対応を目的とする。	「交流ネットワーク構想」と「多極分散型国土形成」を目的とする。その手段として都市農村交流やリゾート開発を位置づけ。	多軸型国土形成のための4戦略の中に観光を位置づけ。特に地域連携軸、多自然居住地域、広域国際交流圏。
観光政策の方向性	○地域格差の縮小 低開発地における自然資源立脚型観光開発 ○交流・親善 都市観光開発による国際交流や都市農村交流	○広域観光ルートの形成 ○大規模観光開発基地の建設 ○自然観光レクリエーション地区・大規模海岸性レクリエーション基地の建設	●国土管理政策における観光 ○自然・文化資源の保護と活用 ○水系・森林・海域の利用 ●国民生活基盤の整備政策における観光	●リゾート地域の整備 ○地域都市の国際交流拠点 ○山岳・海洋地域でのリゾート開発 ○農山村での長期滞在リゾート整備	●国内および国外からの観光の振興 ○地方圏への外国人客誘致など国際観光の振興 ○国内観光の振興 グリーンツーリズム、バリアフリーなど
観光関連のキーワード	○ソーシャルツーリズム ○国民宿舎	○レジャー ○大規模開発	○地方の時代	○リゾート ○交流 ○コンベンション	○庭園の島 ○多自然居住地域 ○地域連携軸 ○広域国際交流圏
観光関連の主要施策	●観光基本法 ●少年自然の家 ●国設キャンプ場	●国営公園 ●長距離自然遊歩道 ●青少年旅行村 ●大規模レクリエーション地区 ●レクリエーション都市 ●大規模年金保護基地	●国際観光文化都市 ●中規模観光レクリエーション地区	●総合保護地域整備法 ●コンベンション都市	●国際観光の振興 ●ハッピーマンデー ●観光産業振興フォーラム

出典：（財）日本交通公社

会最後の答申「二一世紀初頭における観光振興方策～観光振興を国づくりの柱に～」です。そして二〇〇二年（平成十四年）四月の小泉首相による施政方針演説に観光振興が初めてうたわれ、「観光」は国土交通省だけでなく、政府を挙げた政策として位置づけられました。なお、二〇〇一年（平成十三年）に実施された中央省庁の再編により一府二十二省庁から一府十二省庁となり、観光はこれまでの運輸省から国土交通省が主に担当することとなりました。

そうしたなかで、当財団の受託調査は中央省庁の政策支援の役割を徐々に強くしていきました。

まず省庁再編の象徴として取り組んだのが「都市観光」、つまり旧建設省と旧運輸省の連携です。当財団でも、中心市街地の活性化に観光が果たす役割を認識し、**アーバンツーリズムに関する研究**を進めました。都市の観光ビジョン策定業務については、**網走市、釧路市、焼津市、台東区、館山市、沼田市、網走市、千代田区、京都市、松阪市、桑名市、喜多方市、葛飾区、佐世保市**などから受託しています。なお、こうした成果は都市観光を創る会が主体となり、当財団ほかが『**都市観光でまちづくり**』（学芸出版社）を出版しています。

当財団は六〇年代から観光の経済波及効果に着目してきましたが、〇〇年代に入ってからは国際比較を可能とするＴＳＡ（ツーリズムサテライトアカウント）に関する自主的な研究を進めてきました。国土交通省においても二〇〇一年より**「旅行・観光産業の経済効果に関する調査」**を実施することとなり当財団が受託して調査を行ってきました。また国土交通省による市町村レベルの経済波及効果の推計を目的とした**「観光消費が地域経済に及ぼす影響調査」**も受託しています。その他、県レベルでは**「沖縄県観光経済波及効果調査」**をはじめとして**青森県、静岡県**、地域レベルでは釧路公立大学との共同研究である**「釧路根室圏の観光経済波及効果調査」**、市レベルでは**「京都市における観光消費経済波及効果調査」**など地域経済に果たす観光産業の意義を改めて認識させる調査を数多く実施することができました。

政策評価、事業評価に関する調査も〇〇年代の特徴と言えます。二〇〇四年以降、国のグローバル観光戦略の一環として実施された**「ビジット・ジャパン・キャンペーンの事業評価及び新たな評価手法確立のための調査」**はその代表例と言えます。また国を挙げて観光立国の推進に向けた事業を展開していますが、二〇〇五年（平成十七年）に外客誘致法を改正して制度化された「観光ルネサンス事業」の推進に関する業務支援も実施しています。

「観光分野における人材育成に関する調査」は、旧運輸省観光部が九〇年代後半から開始し、そのお手伝いを当財団で実施しました。大学、高校、専門学校、観光地の現場などそれぞれの分野での人材育成の現状と課題が整理されています。当財団では二〇〇一年から**「海外における観光教育機関に関する研究」**を自主研究として展開しており、欧米を中心に主要な大学や研究機関への取材を実施してきました。二〇〇六年（平成十八年）度から開始された**経済産業省のサービス産業人材育成事業**も含めて、観光分野の人材育成は今後ますます重要な課題となっていくものと思われます。

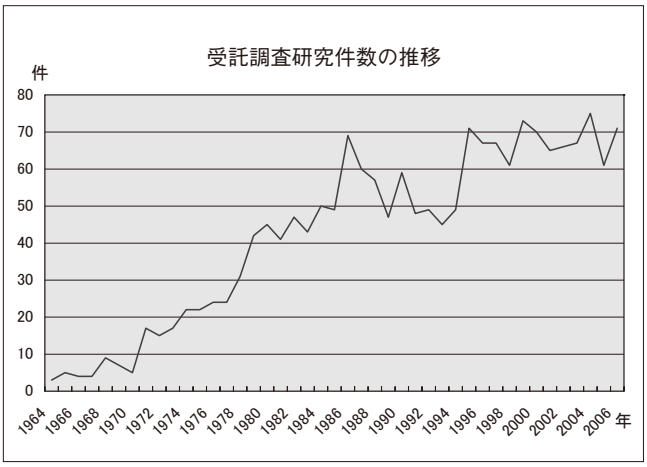
そして、エコツーリズムに関する調査研究は、九〇年代後半から当財団の自主研究としてスタートし、〇〇年代に入って急速に進められました。二〇〇一年に国土交通省から**「エコツーリズムを通じた魅力ある地域づくりに関する調査」**を受託して以降、インタープリテーション・ツーリズム（自然ガイドツアー）に関する調査が四カ年にわたり実施されました。その成果として**『エコツーリズム　さあ、はじめよう！』**や**『魅力ある自然ガイドツアーづくりの手引き』**など数冊が出版化されています。また、環境省は国立公園等エコツーリズムモデル推進事業を二〇〇四年度よりスタートさせました。当財団では本省業務の支援とともに、十三カ所のモデル地区のうち白神や富士山麓、小笠原など数カ所でモデル事業の推進支援を実施しました。

観光分野のバリアフリーに関する調査研究も〇〇年代に入って急速に進みました。二〇〇四年度からスタートした**「沖縄県バリアフリー観光推進事業」**は、バリアフリーの問題をハードに頼らず、ソフト、おもてなしの問題としてとらえ、三カ年にわたり徹底した人材育成とモデルツアーの実施による啓蒙活動に重点を置き、癒やしの島・沖縄をアピールした事業でした。

産業観光（ヘリテージツーリズム）に関する調査研究が進んだのも〇〇年代の特徴の一つです。二〇〇一年には自主研究としてヘリテージツーリズム研究会を設置し、**「産業遺産保存活用方策活用マニュアル」**を作成しています。二〇〇四年度より国土交通省は**「産業を活用した観光振興事例調査」**を実施しており、当財団が作業を受託しました。

一方、過疎地域の活性化を目的として

二〇〇一年から取り組んだのが総務省自治行政局過疎対策室からの委託による**「過疎地域におけるマルチハビテーションに関する調査」**です。その後、**「交流居住」推進業務**として六年間にわたり、調査研究とモデルツアーの実施、首都圏におけるPR事業など多様な業務支援を行いました。なお、国土交通省では二地域居住政策として団塊世代を対象に積極的な展開がなされています。



都道府県の観光振興計画の策定支援は〇〇年代に入って**沖縄県**や**三重県**において実施しています。特に三重県は二〇〇四年度に観光ビジョンを策定し、その後の計画監理、さらには観光ビジョンに基づく誘客戦略の策定、三カ年をかけた観光統計の変革と顧客満足度調査（CS調査）の実施など、県の観光政策をトータルに支援してきました。

その他特筆すべきは、国際協力機構（JICA）が行う途上国に対する観光支援業務を受託したことです。**「途上国の観光開発におけるコンテンツ開発業務」**は、途上国で観光振興に取り組む人材の育成を目的としたテキスト（教科書）の開発です。また、南米四カ国の**メルコスール観光振興プロジェクトの支援**や**イラン国の観光人材育成事業**なども受託しています。

おわりに

このようにわが国の社会経済環境の動向や消費者志向の変化等に対応して、当財団がさまざまな調査研究事業を行うことができた背景には、国土交通省をはじめとするクライアントの存在が欠かせません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

当財団の調査研究事業の特徴は、旅行する消費者の実態やニーズを踏まえた観光計画の策定、そして観光政策の立案支援にあると考えます。その意味で、地味ではありますが、定期的かつ継続した調査である当財団発行**『旅行者動向』**、**『JTBF観光経済レポート』**の存在は欠かせません。常に観光客と観光地、そして観光産業を総括的にウオッチしつつ、受託業務に取り組んでいることを最後に付け加えておきたいと思います。

（うめかわ　ともや）

旅行者動向 2007／JTBF 観光経済レポート［(財)日本交通公社］

連載Ⅰ
あの町この町
第24回

木の文化――愛媛県・久万高原町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

関東以北の人は四国というと暖かいところと思うようだ。南国のイメージがあるのだろう。だから「四国の冬は寒い」といわれると、けげんそうな顔をする。雪が降るときくと目を丸くする。

南国のイメージは、むかしペギー葉山が歌って大当たりした「南国土佐を後にして――」のせいかもしれない。土佐の冬はよく知らないが、四国最南の位置からしても、また海流のせいもあって、少なくとも海岸部はけっこう暖かいと思われる。

私の知っている四国は冬ともなると冷えこんで、風がきびしい。雪が舞う。土地の人には当然のことであって、久万町教育委員会発行の文化だより『くま』32号の編集後記にあたる小文は、「雪どけ」のことで始まっている。

「雪がとけると緑の季節。三月から五月にかけては国土緑化強調期間で……」

発行日が三月だから季節のたよりにしたようだ。久万高原の雪がとける。つづいて国土緑化から森づくりに話題がうつるのは、久万町が木材を主産業とする町であるからだ。しめくくりは「まず、森に行って、森林浴でも楽しんでみませんか」。

地図の上では県都松山の南隣りだが、しかし、松山から久万は七〇〇メートルをこえる三坂峠を越えなくてはならない。いまでは車やバスが一気に走り上がるが、かつては大いに難渋する道だった。車道ができてからも、冬季はしばしば凍りついて通行禁止になった。

十年ほど前になるが石鎚山に登るために長距離バスにゆられていた。松山発のバスは高知行。石鎚山登山口のある面河に行くため久万で乗り換えた。久万町がスギ丸太の産地と聞いていたので、走るバスの中から注意してながめていた。目のとどくかぎり、どの山も整然としたスギ林に覆われている。

途中の美川で土佐街道と分かれた。そのあと山のたたずまいが変化して、雑木林が多くなった。見上げると思いがけない高み、陽当たりのいい南向きの斜面に民家が点在している。午後の陽ざしがうっすらと白壁を朱に染めていた。

バス道のわきに、ときおり無住の家があらわれた。壁が落ち、軒の傾いた廃屋もある。バス停わきでそんな一つと出くわしたが、軒下に不用品が捨てられていた。木槌、天びん棒、米びつ、洗濯板、臼、木鉢、杓子、鋤の柄、色あせた木魚もあった。いずれも木でできている。

傾いた納屋の柱に丸い木の輪がひっかけてあった。骨のように白っぽく、こころな

しか象牙のような艶がある。目をこらしたがわからない。バスの運転手にたずねると「牛の鼻輪」とのことだった。ふつう「オノオレカンバ」という木で作られている。固くて丈夫で、それに少し匂いがあって、牛がその匂いを好むのだそうだ。日常の暮らしから牛の鼻面にいたるまで、すべて山の木が支えていた。それがそっくり無用の品として捨てられた。

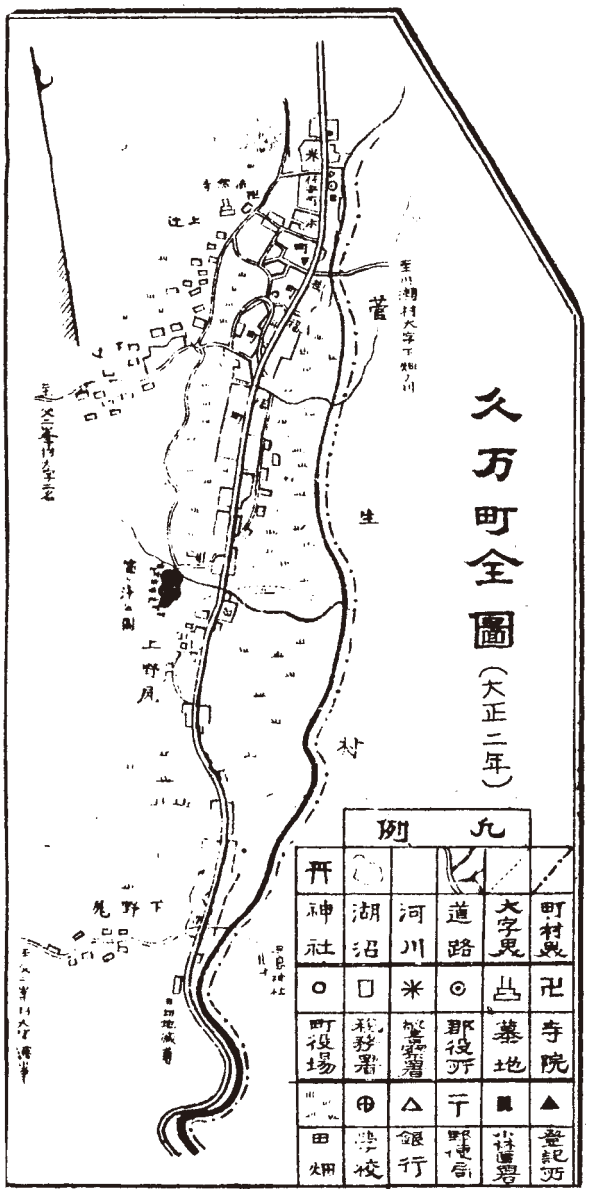
現在は久万町ではなく久万高原町である。平成十六年（二〇〇四）、面河村、美川村、柳谷村が久万町と合併した。新久万高原町は面積五百八十三キロ平方。人口約一万一千。旧久万町とくらべ面積において約五倍、人口では一・三倍になった。その比率のちがいからも、過疎のすすんだ山村三つが、山林業務の中心町に吸収されたことがうかがえる。

三坂峠にさしかかると、ときおり展望がひらけ、松山市街から瀬戸内海がよく見えた。松山生まれの正岡子規は明治十四年（一八八一）、旧道を通って峠へ出た。ときに十五歳。当時はこれぐらいの年齢でも漢詩をつくっていたようで、そのときの作が残っている。

三坂山頭凸又凹
層層雲霧掛松梢
寥寥市遠人行少
無奈山家乏美肴

十五歳の少年はひとけのない峠に着いてはるばる遠くへ来しものかなと思ったのだろう。なにしろ食い盛りである。そのころ峠には茶店が二軒あったというが、「山家美肴に乏しきをいかにせん」。つまり、ろくすっぽ食うものがないじゃないか、である。せっかく茶店をたのしみにしていたのに、がっかりした少年の顔が目に見えるようだ。

バスはまっしぐらに南へと下っていく。眼下に盆地がひらけ、そのかなたは大



文化だより「くま」第28号（昭和63年3月発行）より

きな山並み。旧久万町は石鎚山から西南にひろがる台地にあって、まわりを一〇〇〇メートルクラスの山々がとり巻いている。

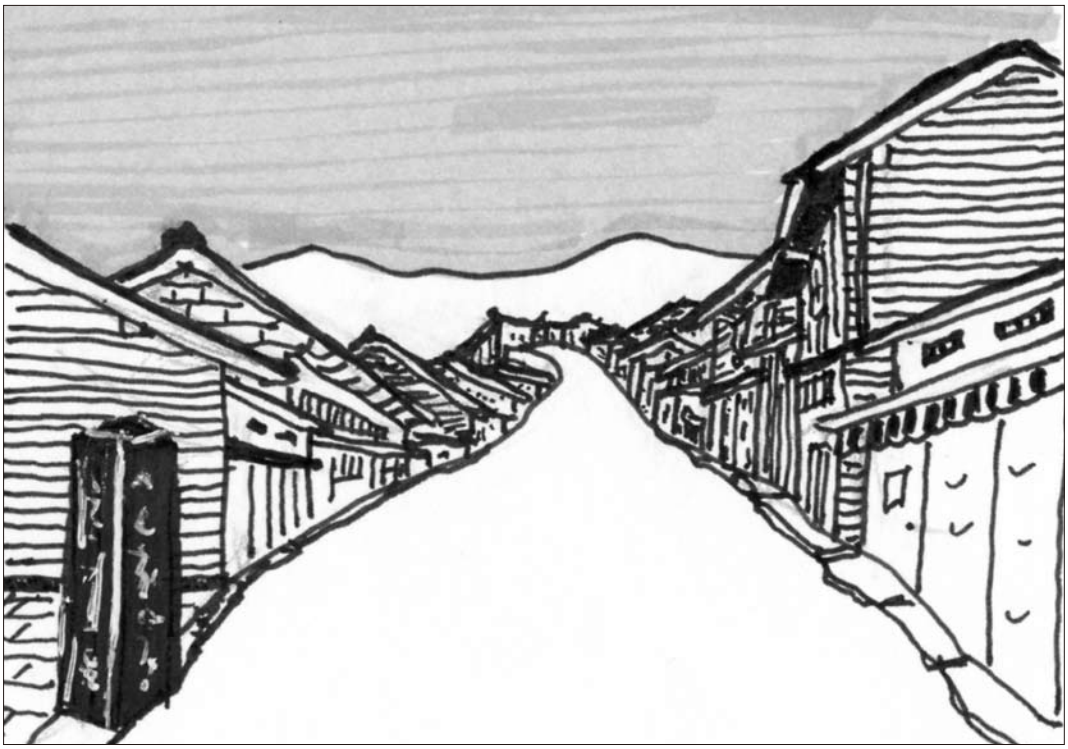
バス停は新道沿いにあって、「本町通り」とよばれる旧道は少し東にあたり、両側の商店もろともゆるやかにうねっている。ちらりほらりと遍路姿が通っていくのは、四国霊場四十三番の道すじにあたるせいだ。

商店街の長さが、かつての町の繁栄を伝えている。歩きながら古風な看板をたしかめていった。理髪店、畳屋、雑貨店、和菓子屋、呉服屋、醤油醸造、造り酒屋、乾物店、文具店、主婦の店、銀行支店、NTT支店、いま一つの造り酒屋と重厚な酒蔵、薬屋、魚屋、金物屋、豆腐屋、スポーツ具店、眼鏡店、印刷屋……。ただし、大半が店を閉じている。NTTも支店をよそにうつした。いまも開いているのは理髪店と荒物屋と眼鏡店と――指を折って数えてみた。

文化だより『くま』に佐川ミサヲという人が、若いころ毎日のように歩いていた本町通りのことを書いている。久万町で催される牛市場が「関西一」とうたわれていたころだから、戦前の商店街だろう。

「現公民館のとなりは高野米店でした。みがきこまれた大黒柱に大きな柱時計のふりこがゆっくり、ゆっくり動いていました」

一つ一つまぶたに思いえがくようにあげていく。山本染屋、田村運送、大田材木、おもご酒店、橋長旅館、相原呉服、高与呉服、高橋蚕種、雪娘酒造、水元呉服、渡部呉服、菊屋呉服、泉熊旅館、矢内本屋、篠崎醤油、三共自動車、二宮醤油、大伴時計店、奥栄茶屋、谷亀旅館――どの玄関にも、大黒柱と大きな柱時計があって、振子がゆっくりと時を刻んでいた。山本染屋には白いひげの主人と小柄



久万高原町本町通り

な妻が、いつも土間の「あいつぼ」に白い「かせ糸」をいれて、何回も染めていた。
「土間はチリ一つなく、白い鼻緒の草履が、踏みかためられた土の光とマッチして、神聖な域の感じがした藍染めの場所でした」
ゆたかな、もの静かな山国の町が、幻のように浮かんでくる。

四国を暖かいところと思っている人は、ここに一五〇〇メートル以上の山が四十もあるのを知らないだろう。剣山と石鎚山を東西の首座にして、背骨のような四国山脈をつくっている。
大きな脊梁の南が太平洋、北が瀬戸内海、どちらも海に行きつくまでに、無数の山々や谷が入りくみ、おそろしく複雑な地形をつくっている。地理学でいう「辺境山村」「奥地山村」が四国に多いのは、錯綜し合った土地に集落ができたからだ。
山村調査にはさまざまな手がかりがあって、職をめぐるとすると、木地屋、杣、木挽、製炭などがポイントになる。ミツマタやコウゾによる紙すき、焼畑の耕作法。栽培作物では、ひえ、あずき、あわ、そば、大豆、とうきび、甘藷、麦。さらには土地所有の形態、共同労働の方法、年中行事や講組のこと。

久万町と合併した柳谷村西谷に中久保という集落があった。現久万高原町の南端で、黒川流域の最奥、高知との県境に近い。標高六〇〇から八〇〇メートルの傾斜地に二十軒ちかくが集落をつくっていた。
この中久保はしばしば共同体のモデルとして山村研究にとりあげられた。正確には全十七戸で藩政時代から分家を許さず、それによって土地の細分化を防いできた。一戸平均の山林所有面積は約五十町歩、畑一反六畝、水田二反。集落全戸の山林を合わせると久万町で「山林王」とよばれる人の所有面積に匹敵し、しかも山林の位置と「地力」とが、おおよそ平等に分けられている。
木材やミツマタが高値で取引された昭和二十年代、柳谷村の中久保は「ゆたかな山村」の代表だった。全戸が瓦葺きで、間口九間、奥行五間、隠居所も同じ棟のつくりになっている。物置は総タイル張り、墓場も屋根つきで、野ざらしの墓石は一つもない——。
文化だより『くま』の佐川ミサヲさんの寄稿は、「ゆたかな山村」のセンターであったころの通りの賑わいを告げている。
「橋長旅館は谷亀と並び一流の旅館。着物姿の主人が南向き帳場に見える。隣家金物屋、奥深く明かり窓の下で五球をはじく主。薬屋くまやの店先は明るい…」

橋詰めの旅館は雨戸が閉じられたまま。荒廃のけはいが強いのは、廃業して久しいのだろう。閉めきったままの薬屋の看板が色あせている。わずかに開いていた荒物屋で果物ナイフを買った。白髪の主人が所在なげに、テレビでワールドシリーズをながめている。
「隣りの酒蔵が立派ですね」
壁に大きく「雪娘」と浮き出しになっている。冬は雪景色になる地方だからこその銘柄だろう。
「もうやめた」
「・・・・・・・・・・」
意味をとりかねて、しばらくボンヤリと主人を見つめていた。やがてわかったが、雪娘酒造が酒づくりをやめたということ。もう一つの久万酒造は「どうやらこうやらやっとる」とか。こちらの銘柄は「お茂ご」、やや甘口で、雪娘は辛口だったそうだ。いまも営業している店をたずねると、「こうっと」と呟いて両手で顎をささえてから、「あれと、あれと、あれと」と片手の指を折って言った。
「いやあれもやめたか」
ひとりごとのように言って指をもどした。かつては全国の山地に無数の集落が点在していた。きびしい生活条件とたたかいな

がらも、生産と暮らしの場を確保して、独自の文化をはぐくんできた。古い時代は「三年一荒」とよばれ、三年に一度の凶作にみまわれたが、それでもたくましくしのいできた。農村とひとしく山村の歴史は二千年に及んでいる。近代化以後たかだか百五十年の都市の歴史など児戯にもひとしいのだ。

昭和三十年代の第一次高度成長あたりから、山村の暮らしが崩れはじめた。自然と一体だった木の文化にかわって化学製品文明が始まり、急速に生活様式が変化した。山村からの人口流出がつづくのは昭和四十年代のこと。「ゆたかな山村」のモデルだった中久保からも離村が出てきた。以来三十年あまり、残留しているのは、わずかに二戸。戸主が村内に職を得て、辛うじてとどまることができた。

久万高原町はステキな美術館をもっている。久万美術館といって平成元年（一九八九）三月開館。当地で「山林王」といわれた井部栄治という人のコレクションがそっくり寄贈され、丸太スギの町が美しい木づくりの建物を用意した。三角状の吹き抜けの天井から、やわらかな光が降ってくる。展示室の広さ、絵の配置、どれといわず申し分ない。

何よりもコレクションがすばらしい。山深い里の小さな美術館に、近代絵画の秀作がズラリと並んでいる。高橋由一、浅井忠、黒田清輝、青木繁。萬鉄五郎や村山槐多や

長谷川利行「のあのあ」（久万美術館所蔵）

長谷川利行や前田寛治や靉光（あいみつ）。さらに海老原喜之助の『二人の女』、古茂田守介の遺作。

井部氏は林業のかたわら政界に出て、県会議員、また県会議長をつとめた。その一方でおよそ政治家らしからぬ人だったことは、東京に出るたびにせっせと好きな絵を買っていたことからもわかる。

政界引退後、自宅でひっそりとながめていた。孫娘に美術好きがいて、おじいちゃんを手伝って目録づくりをした。町当局は名前のあたまに「井部記念」とつけることを提案したが、当人がピシリと拒絶した。その死後、井部夫人をはじめ六人の息子、娘たちは、これだけの「財産」を無償で譲ることに対して、いっさいの異議を申し立てなかった。

バス通りから少しそれた繁みのなかに、優雅な建物が見えた。板間のフロアがここちいい。高台にあるのでガラスごしに久万高原の山並みが望める。

振り返り振り返りながら本町通りにもどった。「へんろうみち」と刻んだ石の道しるべの向こうが大宝寺への総門橋。歩き遍路の人がリュックをゆすって速足で通っていく。大宝寺はむかしはお遍路さんだけでなく、サーカスがテントを張ったり、浄瑠璃の一座がきたりした。芝居の一行、漫才や浪曲、地元太夫による人形芝居。参道に百八灯のともる夜もあった。

おいしいカステラをつくる店があると聞いて、本町通りを歩いていった。プーンといい匂いがして、白い帽子のカステラ職人が二人、手ぎわよく仕事をしている。小さな店だが赤子を抱いた若い母親、つづいて贈り物の相談にきたおばさん。いまでは松山からも求めて人がくる。

商店街の切れるところに新旧木づくりの建物が向き合っていた。古いのは上浮穴郡の事務室に使われているもので、大正調のハイカラ木造。歳月を経て、いいぐあいに古式をおびてきた。向かいの新しいのは久万小学校本館。正面玄関から左右にのびる部分が艶のある丸太スギを用いてつくられている。さほど大きくないのに堂々とした貫録を思わせるのは、木組みのもつ造形力のせいだろう。前を見たり後を見たり、しばらくのあいだウットリとながめていた。いつまでも安っぽい化学製品が幅をきかせるはずがない。いずれ山の文化がもどってくるにちがいないのだ。

同じ通りを引き返してきたら、細い露地との角に石が据えてあって、太字で「今吉」と彫りこんである。その前の三階建ての建物は二階と三階に手すりがつき手のこんだ飾りがほどこしてある。かなり荒廃しているが、どことなく艶っぽい。以前は料亭として夜ごとに賑やかな声が洩れていたのではあるまいか。

飾り窓に陶磁の壺や大皿が置かれていた。古伊万里の皿のセットが目をひいた。引き戸が細目にあいている。そっとのぞくと、小さなポッテリとした頬のおばあさんが、広い土間に椅子を据えてすわっている。目があったので、ゆっくり立ち上がり近づいてきた。

「いいお皿ですね」

「みなさん、そうおっしゃいます」

つづいて「わたしには皆目わかりませんが」とつけたして、ニコニコした。童女のような顔に品があって、こよなくやさしい。「今吉」の意味をたずねると、今治からやってきた吉次さんが始めた店のよし。

「わたしのおじいさん」

それが祖父のことなのか、「おじいさん」と言い慣れていたつれ合いさんのことか、どちらともつかなかったが問い直さなかった。

「お達者で」

そっと肩に手を置くと、とろけるような細い目になった。つぎの角で振り向くと、やはり石像のようにじっと戸口に佇んでいた。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
明治のジャパノロジスト
F．ブリンクリーの
「美しい国ニッポン」③

英字紙発行で明治政府を代弁する

旅行ジャーナリスト
沢木　泰昭

一九一六年（大正五年）十二月十六日付の『ザ・タイムズ』（英国）に「日本の英国人」と題するレポートが掲載されています。その中で、フランシス・ブリンクリーについて次のような記述があります。

「近年、日本に貢献した英国人として最も有名な地位を占めたのは恐らくフランシス・ブリンクリー大尉で、彼はその長い有益な生涯の大部分を日本で過ごし、奥の深い日本学者となり、ジャパン・メイル紙編集長、タイムズ東京通信員として広範な影響力を行使した。彼の死後、日本は英語世界における顕著な代弁者を失っている」

英国公使館補・守備隊長として「ちょっとだけ日本で仕事するつもりだった」アイリッシュの青年は、三度のお雇い外国人経験を経て、一八八一年（明治十四年）に英字紙『ジャパン・メイル』の発行人・主筆になります。来日十四年目、四十一歳のときです。

ジャーナリストとしてのブリンクリーは明治政府にとっては心強い存在になります。脱亜入欧政策をとる上では、またとない後ろ盾。条約改正や国際化への後見人として政・財界から迎えられることになります。

一八九三年（明治二十六年）には「Yokoso! Japan」の黎明と言える日本初のインバウンド機関「喜賓会」が設立されます。その発起人にもブリンクリーは名前を連ねています（次号詳報）。

冒頭にご紹介した『ザ・タイムズ』のレポートは、明治政府の黒衣的存在だったブリンクリーの一端を物語るものです。

帝国議会の議事録を翻訳

ブリンクリーはなぜ、黒衣的存在だったのでしょうか。「明治のジャパノロジスト」だったブリンクリーならではの生き方、人生観がこのへんに隠されているようです。

発行人・主筆を務めた『ジャパン・メイル』は明治期の代表的な英字紙です。横浜開港資料館ライブラリーには同紙がズラリそろえられていますが、紙面でブリンクリーの名前を見つけることが困難です。ジャーナリストとして、あえて記名しなかったのでしょう。ブリンクリー同様にダブリンからやってきて日本に定住したラフカディオ・ハーン（小泉八雲 一八五〇～一九〇四）とは、この点が異なります。ともに同時代に生きた日本通ですが、ハーンは作品を発表し、名前を残します。

一方のブリンクリーは無記名で多くの日本論を展開します。その日本論は、日本への好感と同情がベースになった日本擁護と日本文化の紹介・解説が軸になっています。

黒衣の好例を挙げます。現在では考えられませんが、ブリンクリーは、帝国議会・

議事録の英語要約を任されていました。日本語の理解力と政府からの信用・信頼がなければ回ってこない仕事です。その要約は『ジャパン・メイル』に転載され、在日の各国外交官が回し読みすることになります。

横浜の三大英字新聞

こうした黒衣的な親・日本派活動は他の英字紙から集中攻撃の的になります。

明治期の英字新聞は長崎、神戸、横浜など幕末に開港した条約港で発刊されました。なかでも横浜の『ジャパン・ガゼット』『ジャパン・ヘラルド』、そして『ジャパン・メイル』は三大英字新聞と評価されます。ところが、英字紙には一種の〝臭さ〟が伴っていました。

多くの英字紙が治外法権時代に創刊されたため、外国人と本国の権益を守ることが発行のポリシーになっていたのです。日本人に侵害されるのを防がなければならない、外国人は全体として日本人より文明程度が高い、一介の旅行者には理解できない日本人の本性……などが編集観念になっていました。

母国や自分たちの権益擁護と利権拡大が大前提になるのは英字紙だけではなく、外交官も同じ。ブリンクリーの多くの上司や仲間たちも例外ではありません。

例外だったのがブリンクリーと『ジャパン・メイル』です。〝ちょっと見〟のつもりで香港総督から幕末の日本に派遣された下級士官のブリンクリーには、政治的使命感が稀薄だったと想像されます。「何でも見てやろう」という好奇心いっぱいの下級士官は数回の「お雇い」の誘いにも柔軟に対応して、日本社会に溶け込みました。帰国を前提としない日本暮らしは、ジャーナリストとして独自な視点とペン先を磨く結果になります。

女王と祖国を見捨てた…

『ジャパン・メイル』はブリンクリーの日本語による取材で他紙が追随できない内容になります。豊富な取材ネットワークへのやっかみもあって『ジャパン・ガゼット』『ジャパン・ヘラルド』などから「お抱え」「癒着」と批判・攻撃されます。『ジャパン・パンチ』に至っては「女王陛下と祖国を見捨て、日本の腰巾着になり下がった」と容赦のない書きっぷりです。

明治政府が『ジャパン・メイル』を相当数買い上げて各国に送ったのも事実。こうしたプロパガンダとしての活用が、誇り高いジョンブルには受け入れられなかったようです。各紙の攻撃にブリンクリーはコラムで大要、次のように反論しています。

「自分は日本人と親しくして、その欠点も承知の上で好感を持っている。そして西洋諸国の対日政策は偏狭であり、思慮に欠けている」

明治中期以後、各国との条約改定でブリンクリーは明治政府のアドバイザーのような存在になります。母国で評価されるのは一九〇二年（明治三十五年）の日英同盟締結後。それは『ジャパン・パンチ』の痛烈な批判への雪辱でもありました。

『ジャパン・メイル』はブリンクリーの没後、経営の合従連衡を繰り返して現在の『ジャパン・タイムズ』にインクの香りを伝えます。

（さわき　やすあき）

ライバル紙『ジャパン・パンチ』が描く『ジャパン・メイル』発行人のブリンクリー。机には“運命と名誉の導くままに”とある。ウィークリー（週刊）は海外向け編集版

連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り45

女の心をもった男たち

旅行作家
山口 由美

リゾートで受け入れられる ホスピタリティとは？

ホスピタリティ産業が、潜在的にゲイの多い業界であるということは、欧米ではずいぶん前から知られていることだ。

外資系企業の台頭が理由なのか、あるいは最近、そちら系の芸能人の活躍が増え、「おネエ」と呼ばれて、彼らの存在が広く認識されるようになったからなのか、日本でも以前に比べて「実は、彼はね」と聞くケースが、増えたように思う。

考えてみれば、男でありながら女の心をもち、ゆえに女以上に女らしく、繊細で美意識が高く、細やかな気配りのできる彼らは、最もホスピタリティ産業にふさわしい資質を備えた人たちと言うことができる。

しかも肉体は男だから力持ち。重いバッグを持ってくれたときなど、か弱きベルガールに荷物を運ばせるときのような心の負担を感じることもない。

特に、こうしたゲイの存在が、何のタブーも偏見もなく受け入れられ、ホテルで欠かせない戦力になっているのが、タヒチやフィジーといった南太平洋だ。

古来、男でありながら女の心をもつ人たちというのは、この世に男と女がいるように、人類においてある一定の割合で発生する類型だったのだろう。南太平洋のおおらかな共同体は、当たり前のこととして、彼らの存在を受け入れてきた。

南の島では、概して男は怠け者だ。狩りや漁や祭りなど、ここ一番というときには張り切るが、それ以外の日常生活では、ヤシの木陰でのんびりしている。一家を支える働き者はたいてい女たち。そして、その女たちよりも気配りの利く働き者が、実は、女の心をもった男たちなのだ。

先進国のホテルマン（というかゲイ）は、男と同じスーツをぴしっと着こなし、見た目は普通の男と変わらない。ただそのしぐさや物言いに「おネエ」のにおいを感じるだけだ。しかし、南太平洋の彼らは、耳元に赤いハイビスカスの花を飾り、時には薄化粧をして、よりはっきり外見から「男でない」ことをアピールする。そして、しなをつくり、大胆に腰を振って歩く。

リゾートでは、レストランやバーで働くことが多く、特にフィジーのリゾートにおけるバーテンダーのゲイ比率は極めて高い。小さなリゾートだと、カクテルタイムはバーテンダーとしてシェーカーを振り、ディナーになればレストランのサービスに目配りをする、そんな役割を担うことが多いようだ。

タヒチなどポリネシアの女たちがしなやかで女性的な美しさに長けているのに対して、メラネシアに属するフィジーの女たちは、たいてい気は優しくて力持ち、細かい気配りはあまり得意としないタイプが多い。

そんな彼女たちの、時に大ざっぱなサービスのフォローをするのがゲイの存在である。実際、フィジーでは何度となく、ウエートレスのサービスに腹を立てた後、女よりも女らしい笑顔に救われて「まあ、いいか」と思ったことがある。

だから、フィジーでは、新しいリゾートが成功するか否かは、いかに有能なゲイを確保するかにかかっているという。かくしてゲイのヘッドハンティングが行われるのだ。

今年の春に訪れたガメア・リゾート&スパでも、長年、リゾートに勤めていた名物バーテンダーが新しいリゾートに引き抜かれ、代わりに本島のビチレブ島にあるホテルの日本料理店から引き抜かれた新顔が、バーで采配を振るっていた。

がっちりとした筋肉質の体、でも、太く無骨な指は、信じられないほど、細やかな動きで、鮮やかな南国のカクテルを作る。

夕方のカクテルタイム、私は、おつまみに出されたミートボールのソースを白いブラウスにつけてしまった。

南太平洋の楽園を絵に描いたような、ガメア・リゾート&スパ

「あっ」と思った瞬間、カウンターの中で彼がトニックソーダの栓を抜いていた。

「普通の水でいいのに」と、言いかけて私は思い出した。染み抜きには重曹、そんな教えがあったっけ。

炭酸入りの水は、よく汚れが落ちた。

「どうしてこんなことを知っているの?」

そう問いかけると、彼は「ビチレブ島の日本料理店で教わったのよ」と高いトーンの声で言った。

「じゃあ、日本語もしゃべれるの?」

そう聞くと、「もう忘れちゃったわ」と体をよじりながら恥ずかしそうな笑顔を見せた。

たとえばレストランで、注文した飲み物が出てこないとき、もう一本フォークが欲しいとき、そんなときには、決まって彼の笑顔があって、いち早く状況に気づいてくれた。

フィジアンは男も女も真っすぐな心をもち、底抜けに明るく、心優しい。そんな彼らのウエルカムは等しく心に残るが、でも、後になって最も思い出されるのは、バーカウンターの中で恥ずかしそうに笑った彼の笑顔だった。南太平洋が楽園であるならば、楽園の至福を支えているのは、男よりも女よりも、女の心をもった男たちなのだと思う。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

本誌『観光文化』に「食と風景の往来」と題して、二〇〇〇年五月から二〇〇三年七月まで二十回にわたり連載したエッセイを下敷きに一冊の本にまとめた風景学と観光学の学術書『**食文化の風景学(小林亨著、技報堂出版)**』。本書は、単なる食事の風景ではなく、食の文化と風景の文化とが相互に融合し、その効果を高め合う事象を取り上げて、人の感性や五感が織りなす景観論として組み立て、まとめられた本。

「よく手入れされた景観の中で暮らし、健康によいものを食べていると自然に心身も美しくなり美的感覚も磨かれていく。実りある人生を享けるためにも、日常の景色・日々の食事に気を配ることが大切」。本書を通じて著者は、「人生の価値」において、景観と食の融合が大切であることを両者のかかわりの中で実証し、示唆してくれている。

A5判　196ページ
定価　2,415円
技報堂出版

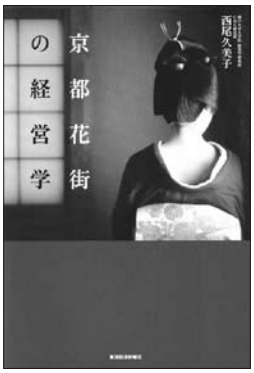
数年前、東京駅の駅構内で京都観光キャンペーンが行われていたとき、二十歳前後ぐらいの舞妓さんがたすき掛けで街頭宣伝を行う姿を見かけ、きらびやかな装いに目を奪われたことがあった。そのときは、「京都の顔だから大変だな」と思ったが、お座敷以外での舞妓さんのさまざまな活動が京都花街の売り上げにも大きく貢献していることなど、当然知らなかった。

昨今の京都ブームの影響があって、舞妓さんを紹介する出版物やマスコミの取材も増えているようだが、芸舞妓さんたちと面識もなく、お座敷に上がる機会のない一般の人にとっては、花街は遠い存在であることは間違いない。こうした京都花街の〝秘密の世界〟を伝統文化産業としてとらえ、その事業およびビジネス構造を分かりやすく紹介したのが『**京都花街の経営学(西尾久美子著、東洋経済新報社)**』。本書では、五年間のフィールドワークを通じて、三百五十年に及ぶ京都花街の歴史とともに、独自のしきたり、芸舞妓さんの教育、おもてなし、経営の考え方まで、花街の産業構造を多角的に分析している点が注目される。

現在の京都花街には、芸妓さん、舞妓さん合わせて約二百八十人が暮らしている。花街全体の経済規模は、約七十八億円(芸舞妓さんたちにかかる費用「花代」のみ)に上る。そのビジネスを支えているのが、京都花街特有のしきたりで、その一つが「一見さんお断り」。花街が産業として継続するためには、一見、経済合理性がないように見えるが、「良いお客様を育てる」上では、重要なシステムとなっている。

花街で提供されるサービスは、顧客の好みによってさまざまで、お茶屋では顧客の好みを十分に分かった上で、芸舞妓さんたちや料理の手配をする。そのため、情報がない顧客の場合、どんなサービスが好みかが分からず、お座敷で顧客に満足のいくサービスが提供できないためだ。

これまでは、京都花街の芸舞妓さんの華やかさだけにスポットが当てられていたが、花街をビジネスの視点でとらえると、人と人との交流の中から育まれてきた、非常にシンプルな「おもてなし」の原点に触れることができる。そういった意味で、貴重な一冊と言えるだろう。　(江口哲夫)



四六判　249ページ
定価　1,680円
東洋経済新報社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■**定期刊行物**

●**旅行年報**（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。

●**旅行の見通し**（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的変化。

●**旅行者動向**（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇七」では、「いまどき若者の旅行マーケット」「『旅行大好き』を探る」を特集。

●**観光文化**（年六回、奇数月二十日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。

●**Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）**
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

■**観光読本**（二〇〇四年六月発行）
東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から十年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■**その他刊行物**

●**美しき日本**
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三百九十一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）"Beautiful Japan"も発行。

●**エコツーリズム　さあ　はじめよう！**
エコツーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引書。

※刊行物に関する問い合わせ、冊子をお求めになりたい方は財団法人日本交通公社　観光文化事業部まで。
電話：03・5208・4704　http://www.jtb.or.jp

次号予告

●日本では、二〇一〇年までに訪日外国人旅行者一千万人の目標を掲げ、観光立国を推進中ですが、次号の特集では、「上質な日本」と題し、観光の質向上についても考えます。

調査研究だより

●今年六月に観光立国推進基本計画が策定されて、観光立国の実現に向け積極的に取り組む体制が本格化しつつあります。

●一方、地方では、日本経済のグローバル化により地域格差が広がり、人口減少、高齢化が全国的に深刻化するなかで、地域活性化としての観光振興は各地に共通した重要な戦略とされています。

●高い国際競争力を持つ魅力ある観光地を形成していくには、個々の民間企業の努力だけなく、観光関連基盤の整備など行政の観光振興策の戦略的な展開が重要です。

●当財団では、観光文化振興事業（自主研究）で、都道府県レベルでの観光行政を対象として、都道府県における観光政策のあり方に関する研究に昨年度から取り組んでいます。

●都道府県庁の観光担当の方々を対象に、〝宣伝プロモーション〟〝魅力づくり、商品化〟〝行政組織体制〟といったテーマで、定期的に「観光政策勉強会」を開催しています。（参加ご希望の方は当財団ホームページをご参照ください）

（岩佐）

編集後記

◆『源氏物語』は宮廷文化が花開いた時代と紫式部の才能が相まみえて誕生した奇跡と評されています。一千年の長きにわたって読み継がれ、今日では世界に誇る古典文学として、英語、独語、仏語を始めとして二十以上の言語で翻訳されています。正宗白鳥がアーサー・ウェイリー訳を絶賛し、その刺激も受けた谷崎潤一郎が現代語訳を完成して戦後日本における『源氏物語』復活につながったと作家の丸谷才一氏は指摘しています。洋の東西にわたる文化交流のたまものと感じ入る次第です。

◆今や「源氏物語」は社会現象と言えるほどの活況を呈しています。映画、演劇をはじめとしてあらゆるジャンルで取り上げられ、なかでも漫画家の大和和紀さんの作品『あさきゆめみし』は一九八〇年の第一巻の発行以降、全十三巻の発行部数トータルで千七百万部を超す驚異的状況です。物語の舞台、宇治市にとっては「源氏物語」はまさにまちづくりのテーマとなり、地域活性化のシンボルです。

◆ともあれ、比類なき文学作品を残していただいた紫式部に深く感謝を表するとともに、来年の「源氏物語千年紀」が日本の輝かしい伝統文化を考え直す縁（えにし）になってくれるものと期待されます。

（宇八）

観光文化　第186号

第31巻6号通巻第186号

発行日 2007年11月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒100-0005　☎03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554